－所蔵作品紹介－

土屋　仁応　TUCHIYA Yoshimasa

麒麟

きりん

作品データはこちら

東京藝術大学で彫刻と保存修復を学んだ土屋仁応(1977年生)は、扱った多様な素材のなかでも、とりわけ木材を好み、木彫で主に動物を制作している。

《麒麟》は高さ73cm。渦巻く尻尾は繋いでいるが、華奢な脚から丸みを帯びた胴体や湾曲する首、頭部まで、すべてクスの一木から彫りだされている。眼は水晶の象嵌。白色系の彩色は繊細な陰影を宿して躯体の微妙な起伏を浮かび上がらせる。頭部など、彫りあとや木の素地を残した部分と違和感なく連なる透明感ある彩色で木目も微かに透ける。土屋は「木が呼吸している感じ」を残したいという。また、その姿は「螺旋構造、生きて活動している状態の造形を意識」するといい(『氷華』No. 58「木の作家を訪ねて23　土屋仁応氏」)、本作も動きをはらむ。だが、漂うのは静謐感で、麒麟の息づかいに耳をそばだてたくなる。

土屋は本作に寄せていう。

「麒麟は、よいことの兆しとして現れるという空想上の動物です。いまこの世界が、麒麟が現れるのにふさわしい世の中なのかどうかは、わかりませんが、その姿を思い描くことは、麒麟が現れるような世界を想像／創造することにつながるのではないかと思っています」。

人が動物に投影する象徴的なイメージ。その深遠でデリケートな振幅を探求する作者が手がけた麒麟。伝統的な木彫技術を生かしながら、自らの内省的な性情と詩的感性に根ざして、樹木の生命感や霊性もたたえた夢幻的なイメージを現出させている。

本作は1982年の当館開館以来、売店と喫茶運営を続けてきたボランティア「常磐会」からの16点目の寄贈作品で、求めに応じて作家が新たに制作したもの。制作中、訪ねた東松山のアトリエで、「呼びかけられて振り返っているイメージ」と聞いた。プレミアム・コレクション展（平成30年1／14まで）で舟越桂や深井隆、三沢厚彦らの木の具象彫刻とともに展示される。

旭川美術館だより「氷華」No.60（2017.３発行）「収蔵作品から」より